

氏名	丸目 龍介
ヨミガナ	マルメ リュウスケ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第620号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ストリートのエキゾチカー東京で考えるー 〈作品〉 I'm your fool 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	中村 政人
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小林 正人
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師	（美術学部）	荏開津 広
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

私の作品は、主に東京のストリートにまつわるものやことを中心とした、自身が強く憧れ、心惹かれる、人やキャラクター、カルチャー、その歴史などを題材に、絵画、彫刻、服飾品、グラフィックデザインの形で作品化したものである。

本論は、私を突き動かし制作に向かわせる憧れや興味の対象について、自身の解釈を明らかにし、それらが作品化される際に起きていること、その状況を「エキゾチカ」という概念を用いて考察していく、自作についての制作論である。

また、定義しづらいものやことも広く受け入れる「エキゾチカ」の懐の深さを肯定的に捉えながらも、自身や自作に関係する部分から出発し、より具体的に「エキゾチカ」について考察し、再定義することをもう一つの目的とする。

「ストリートのエキゾチカ」とは、自作や私自身のことを言い表したものであるとともに、私と作品で扱う題材、対象となるものの関係性、その関係性の上で作品が形作られていく過程や状況などを指したものである。

「エキゾチカ」

「エキゾチカ」という言葉は現在一般に、風変わりなものや異国情緒のあるもの、その雰囲気を目指し示す際に使われることの多い言葉であるが、私がここで参照する「エキゾチカ」とは、特に音楽のジャンルにおける「エキゾチカ」や、そういった芸術作品が生まれる場や状況などを言い表した言葉、概念である。

「エキゾチカ」の代表的なアーティストである音楽家マーティン・デニー（Martin Denny, 1911 - 2005）は、現地の雰囲気に感銘を受けたハワイへと移り住み、「南国の楽園」を音楽で表現する。その「南国の楽園」がハワイアン・ミュージックとは違うものになってしまう、または意図的に違うもの、新しい表現にするという過程や生み出された作品には、私の作品や作品のおかれる状況、またその他の参照する様々な

人やものやこととも共通点があると考えられる。

マーティン・デニーの作品は、空間に「南国の楽園」的なエッセンスをプラスするためのBGMとしても明確な用いられ方をしてきたが、想像や妄想、思い入れや思い込みが生み出す作品や表現は、聴き流せるものではない。

本論の構成

第1章では、自作で扱う題材、参照しているものやことから特に扱う頻度が高いものを具体的にあげ、それらの概念的側面、また、フォロワーである自身の眼差しの先にある「大好きなもの」としての題材について、自身の解釈を明らかにし、それらが纏う意味やそれらを用いることで生じる意味、望む効果などを論じる。

第2章では、修士課程修了展出展作品を起点に、第1章で取り上げた題材などが作品化する際に起きていることを論じ、自作や、その制作過程、表現の段階から、「作品」や「美術」について考察する。

第3章では、グラフィックデザイナー、アーティストであるスケートシングや、音楽家ヤン富田の活動、言葉から、「エキゾチカ」的“場”が作られる環境としての東京や、影響関係にあるものやことの間が存在する時間や距離について考察する。

また、自身や自作に強く影響を与える「東京」や「ストリート」についてより具体的にその在り方を示す。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、東京のストリートにまつわる作品制作に取り組んできた丸目龍介が、「ストリート」「エキゾチカ」「東京」という言葉をキーワードに、その自身の作品の根底にあるものを探り、それを論文として整理しようとした試みの成果である。丸目の作品は、会が、彫刻、服飾品、グラフィックデザインなど多様な形をとってきたが、そこにはある種のカルチャーに対する一貫した感覚が貫かれている。それを、丸目は、とくに「エキゾチカ」という、美術の世界ではあまり聞きなれない「エキゾチカ」という言葉を自身の作品世界を語る鍵として、音楽家マーティン・デニーの世界を参照しつつ、論が点ら解されていく。

本論文の構成は3章からなり、第1章「題材について」では、Tシャツ、ステッカー、グラフィティ、アメリカンコミックスなど、一見すると純粋芸術と関係ないと思われる作品世界に言及する。丸目は、そのような世界を、単にデザインというジャンルに属するものではなく、現代アートともクロスする表現として捉え、独自の境界領域の可能性へと眼差しを向ける。続く第2章「自作について」では、第1章で取り上げた作品世界とも重なる自身の作品について紹介・考察を行う。様々な例を挙げた後に、「作品とは、また美術」とはという考察で締めくくる。そして最後の第三章「エキゾチカとは」では、音楽家マーティン・デニーに言及しつつ、それを東京という丸目自身が生活し作品を発表している場と重ね合わせることで、独自の東京論・ストリート論を結論付けている。

東京という都市の路上で展開された現代アートには、かつてハイレッド・センターの東京ミキサー計画など先立つ物があつたが、それらがアートという文脈の中で問題提起していたのに対し、丸目のスタンスには、現代アートとも、デザインとも、ポップカルチャーとも、その一つのジャンルに括ることのできない「東京」が立ち上げられており、丸目のこれまでの作品だけでなく、今後展開されるであろう作品も、この論文と重ね合わせて想像してみると、その表現者としての可能性に大いに期待できるものがある。それを論文という形で整理しまとめ上げたその成果は、大いに評価できるものである、よって本論文を東京藝術大学の博士論文として合格とする。

(作品審査結果の要旨)

丸目龍介の作品はそのカルチャーに属してる者が喋る言語で作られている。その言語は声高に押しつけがましく叫ばれてはいないので聴き取りにくい。無論彼はシャイというわけではない。デジタルネイティブなので大声を出す必要が無いだけだ。

だからアートなんだよね！

針金ネームシール作品の造形感覚なんてルールが分からないと素人はどう見ていいか分からない、現代アートのプロパーだってナンノコッチャ！って感じだ。でもルールがわかってくると彼の意図にウイルスの様に感染する。何を作るかではない、彼の作品には自分たちはどう作るか？がはっきり示されている。つまりTシャツならTシャツ、キャップならキャップの形を借りてそれを自己流にカスタマイズしながらジャンルを横断しストリーートのディテール、“互いを拘束しないジャンル同士の関係”をカタチにしている。大切なのは遊び方、カッコイイモノの作り込み方だ。特に丸目の“ディテール”へのこだわりは現在の東京、これからの東京をよりリアルに生きて行こうとする“術(すべ)”であり、高度にリアルな“生の作品”だと思う。

いつだって発信源はすごく小さい場所なのだ！東京のエキゾチカ、ストリートで生まれた博士の作品がどう世界へ染み渡って行くのかワクワクするよ。

2020年、これからの東京で自分たちがそれでも幸せに生きていくにはどうやっていけばいいのか？を真摯に問う“作品”を高く評価する！

(総合審査結果の要旨)

博士論文「ストリーートのエキゾチカー 東京で考える 一」は、丸目の作品制作にたいする姿勢や考え方を表現が派生する根源的な情報の在り方から、具体的な事象を紐解き丁寧に論考している。元来、現代美術という文脈においてここで論考している「ストリート」「グラフィティ」や「イラスト」「ファッション」等のジャンルを横断的に表現するアプローチは、あまり前例がない。

「芸術」として語りにくかった領域にたいして実制作を通じて、また、ストリートカルチャー界での作法や自身の影響関係の文脈を整理して明快に論じている。また、作品に漂う出自が読み取りにくい情報源は、「東京」というイメージの出自と重なり独特な形象感、作風を生み出している。特に「エキゾチカ」という視点は、アジアの都市が近代化していくプロセスにおいて時代と共に変化していく流行と密接に関係している。要旨において『「エキゾチカ」的“場”が作られる環境としての東京や、影響関係にあるものやことの中に存在する時間や距離について考察する。』と論考の視点を語っている。それは、「東京で考える」という丸目のアイデンティティを形成する自己形成の基軸であり、表現する心の琴線に触れる繊細な切り口と言え、表現の純度が高い。論文全体として、今までにない新鮮な表現領域を考察する視点の鋭い論文となっている。

作品は、論文での視点を理解して読み取るとその「東京」に漂う文化的文脈が感じられ時代の先を示唆する感性を持つ作品となっている。本論でも触れているように東京美術学校開校時に、張りぼての造形は「美術」といって認められなかったように丸目の作品のアプローチは、アカデミックな「美術」としては、そのジャンル感から未だ認識されにくい表現方法と見なされるかも知れない。しかし、この論文において美術の文脈としての接続が深く関与していることが表明されたことにより、この表現領域の先駆者的存在として評価できる研究性と完成度を持つと考え博士審査を合格とする。